

REPORT

階層別研修と激励会

コロナ禍に入職してきた令和2・3年度、令和4・5年度の職員を対象とした階層別研修と激励会が11月・12月にそれぞれ開催されました。この年代は、感染対策のため新人研修はリモートで行われ、新人歓迎会も開催することができませんでした。今回の研修は、コロナ禍の間に中止になっていた様々な集合研修を再開し、共和会としてコミュニケーション力を回復させることを目的として開催されました。

研修では「職場でのコミュニケーションを活発にするために私たちが取り組むこと」をテーマにグループディスカッションそして発表が行われました。入職当時、ソーシャルディスタンスやマスクの着用等で患者様や先輩と円滑なコミュニケーションをとることが難しく、業務においても様々な苦労があったことが発表から伺えました。そして、それぞれが掲げたコミュニケーションの課題に対して、前向きに行動を起こしていこうという姿勢も見えてとても頼もしく感じました。

研修の後は会場を移して激励会を行いました。入職当時の上司の元に挨拶に行ったり、部署や職種が違う職員たちが語り合ったりと、普段はなかなか話す機会がない職員間の交流が深められたようです。改めて、コミュニケーションの大切さと楽しさを感じた激励会になりました。

研修の様子



激励会の様子



◆当院へのアクセス

JRの場合

「南小倉駅」(日豊本線・日田彦山線)より片野方面へ徒歩10分

バスの場合

「木町二丁目」バス停(セブンイレブン前)より小倉南区方面へ徒歩10分

都市高速の場合

「紫川IC」清水方面車線出口よりすぐ右側

カーナビでお越しの際は、

NAVI 北九州市小倉北区篠崎1丁目5-1と入力してください。



KR 医療法人 共和会

小倉リハビリテーション病院 / 介護老人保健施設 伸寿苑 / 共和会地域リハビリテーションセンター

TEL.093-581-0668 (代表) FAX.093-581-3319 (共通)

〒803-0861福岡県北九州市小倉北区篠崎1丁目5-1 <http://www.kyouwakai.net> 共和会 検索

公式SNSで情報配信中!



Careline

KYOUWAKAI Press ケアライン 2025 新年号 / その人らしいくらしの実現...共和会におけるソーシャルワーク活動

発行 医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院 / 連携広報部 井上崇

Careline

KYOUWAKAI Press ケアライン

2025

新年号

特集 その人らしいくらしの実現...共和会におけるソーシャルワーク活動

REPORT 階層別研修と激励会

新年の挨拶

新年あけましておめでとうございます。

昨年は元旦から能登半島を中心とした大地震、翌日は羽田空港での飛行機接触事故、さらに3日には小倉の繁華街での大火災と、新年早々、甚大な被害をもたらす災害や事故が起きました。どんな年になるか心配しましたが、夏の猛暑はあったものの、新型コロナ感染も徐々に落ち着いてきた1年でありました。病院として常日頃から大災害や不慮の事故に対する更なる備えをしなければならぬと痛感しているところです。昨年は診療報酬・介護報酬、障害福祉サービス等報酬のトリプル改定がなされました。リハビリテーション関連では、リハビリテーション、栄養管理、口腔管理の一体的体制が求められるようになりました。介護保険分野において医師を中心とした良質なリハビリテーションサービスの提供が必要となり、加えて管理栄養士、歯科医師、歯科衛生士の役割も重要になってきました。

昨年夏には良質なリハビリテーション医療を提供すべく、5度目になる病院機能評価を受審しました。前回の受審で課題として指摘されました医療安全、院内感染対策におきまして、5年間の改善努力の成果を認めていただくことができました。さらに、地域に根ざし、安心・安全、信頼と納得の得られる医療サービスを提供できるよう、常日頃から努力している病院として認められたいと強く思っているところです。

本年もご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院 病院長 梅津 祐一



関門海峡の日の出

その人らしい暮らしの実現... 共和会におけるソーシャルワーク活動

当法人は現在、小倉リハビリテーション病院14名、老健施設伸寿苑4名、共和会地域リハビリテーションセンター2名の総数20名のソーシャルワーカー（以下、SW）が勤務しています。今回は共和会SWの活動の歴史と現在のSW活動を紹介します。

地域のニーズに応える共和会ソーシャルワーカーの歴史

前身である南小倉病院は1962年に精神科の病院機能で開設し、1972年に医療法人共和会として法人化しました。その頃から多数のSWが配置され、患者の社会復帰を念頭に婦人会や自治会、学校、保育所との交流など地域活動を行っていました。

1980年代に入ると、急速する高齢化に伴い社会問題となった家族介護や地域の課題に対する地域活動をSWが中心に行いました。高齢者やその家族が一人で介護の悩みを抱え込まないように地域のネットワークづくりに取り組みました。市場の精肉店やタバコ屋などに「年長者相談連絡所」のプレートを設置し、悩みを抱える方がいれば、SWが地域へ出向き、相談を受けました。

当時、在宅支援サービスが十分に整備されていないため、高価なベッドを準備できない方に対し、病院にあるベッドのレンタルを始めたり、地域の食事が作れない方へ職員による弁当の宅配ボランティアを始めたりと、地域の課題に積極的に取り組んできました。1990年代には小学校への車椅子体験教室や地域住民によるボランティア活動の受け入れ等の教育啓発活動も行ってきました。

こうした時代や地域のニーズに応えるSWの基本姿勢は、現在の患者、利用者、家族、地域住民へのSWの活動の風土として、私たちの支援の礎となっています。

その人らしい生活の再建に向けて、身近な相談相手としてSWを病棟配置

当院は2000年介護保険制度・回復期リハ病棟創設とともに病院機能を「リハビリテーション」に特化しました。病院部門は2002年から患者・家族の生活の身近な相談相手として、患者生活の近くで業務 できるようSWを病棟配属とし、SWが相談を待つだけでなく、自らが患者の基へ出向くスタイルに変更しました。2004年には急性期病院との連携強化の為、連携・広報室に専属のSWを配置しました。現在の連携室SWは、増加する身寄りのない方の紹介に対し、転院前から今後の生活を見据えた急性期との連携を行っています。2011年以降は、入院（障害者病棟）・入所（伸寿苑）の生活期領域にSWを増員し、近年は退院後のその人らしい暮らしの支援に向けて在宅部門の生活期（外来・地域リハ）領域の配置を増員しています。現在、勤務するSWは2000年代に就職した職員であり、上述の所謂“共和会のソーシャルワーカー魂”を受継ぎつつ、新たな活動を模索しています。

近年の共和会SWの配置人数▶

		2008	2011	2017	2019	2024
病院部門	7F(回復期)40床	2	2	2	2	2
	6F(回復期)40床	2	2	2	2	2
	5F(障害者)40床	1	2	2	2	2
	4F(回復期)38床	2	2	2	2	2
	3F(回復期)40床	2	2	2	2	2
	外来リハ			1	2	2
	連携広報室(前方連携)	1	1	1	1	1
老健部門	伸寿苑	2	3	3	4	4
在宅部門	地域リハ		1	1	2	2
産休・育休						1
	計	12	15	16	19	20

つながり支援 — “築いてこられた生活や周囲との関係性”の理解と支援—

病院SWの支援の特徴

発病後や入院生活の不安な気持ちを理解・支援しながら、これまで築いてこられた暮らしの理解を深め、思いに寄り添うことを大事にしています。そのためにも私たちはこれまでの暮らしをお聞きする際はご家族・友人等とのつながりや担われてきた役割、活動などをより深く理解することに努めています。発病直後はこれまでの暮らしを諦めてしまう気持ちにもなりやすく、心身機能の総合的な復活に向けて多職種と協働しながら、その人らしい暮らしの再建を支援しています。2016年から、よりつながり支援に注力して取り組みをしています。また協働する支援者は専門職だけでなく、時に当事者の方の力を借りることも共和会SWの支援の特徴です。当法人には陽向の会（片麻痺の会）、筍の会（失語症の会）、スマイル（重度若年障害者自立支援の会）の3つセルフヘルプグループが活動しており、ピア（当事者同士）のつながりを活かすことも念頭に支援しています。また外来リハに専従SWを配置しており、自宅復帰が目標でなく、その人らしい暮らしの再建に向けた社会参加（就労・スポーツ・芸術・交流活動）を支援しています。新規就労の場合には、しごとサポートセンターや障害者職業センター等とも連携し、仕事を通じた新たなつながりの創出を目指します。

老健SW(支援相談員)の支援の特徴

医療機能の4分野の一つである慢性期（生活期）のリハビリテーション・ケアを提供するのが介護老人保健施設です。老健は2005年に理念・役割を①包括的ケアサービス施設②リハビリテーション施設③在宅復帰施設④在宅生活支援施設⑤地域に根ざした施設と整理され、その中で支援相談員の在宅生活・在宅療養支援の役割も非常に重要なものとなってきました。地域の中核施設として、医療機関や在宅サービスの関係者等と連携し、Face to Faceの関係に努めています。

在宅部門SWの支援の特徴

在宅サービス（通所リハビリテーション、訪問看護ステーション、訪問リハビリテーション）の窓口として、また各サービスの相談員として活動しています。病院を退院する際、生活の再スタートがその人の生活の目標に沿ったものとしてスムーズに開始できるように、病院の担当SWや居宅ケアマネジャー等と退院前から協働し、退院前訪問への同行、カンファレンスへの参加等を積極的に行っています。在宅チームの関わりは長い期間に渡る為、生活の中で起こる様々な変化に対し、社会福祉士としての専門性を以て、時には利用者様の代弁者として、時には社会資源を模索し地域の活動参加へ繋げていくコーディネーターとして取り組んでいます。

つながりが希薄化している地域への活動

当法人では2013年に時代のニーズに応えるべく、今まで実践してきた法人の地域活動を組織化した「共和会地域包括ケア推進本部」を設置しました。職員をプロボノ※として登録し、地域づくりの推進を行っています。推進本部は、1地域リハ・ケア活動推進部会、2自助・互助活動推進部会、3連携・ネットワーク推進部会の3部門で構成されており、介護予防支援活動や認知症カフェ、セルフヘルプグループ支援、障害者スポーツ支援、地域への啓発活動等、私たちが持つ知識や技術等を活かす支援だけでなく、地域の祭りや餅つき、紫川周辺の清掃活動まで、とにかく地域が元気になる活動を行っています。

プロボノ活動をしていると高齢者の生活や民生委員との関係が私たち支援者にとっても身近な存在となり、退院時に私たちも民生委員と顔合わせをしたり、社会参加の場としてサロンを活用したりと私たちSWの支援も変化してきました。同時にこのような退院支援の活動は、今後より一層深刻化が予測される地域生活でのつながりの希薄化や身寄りのない方の孤立防止への活動になるとも考えています。先代のSWが社会情勢を踏まえながら活動してきたように、今の私たちSWも地域の包摂性を高める活動や孤立防止に対し、活動を発展していく所存です。



※各分野の専門家が、職業上持っている知識・スキルや経験を活かして社会貢献するボランティア活動全般。またそれに参加する専門家自身